

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 99 Dec.

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 99 Dec. 2018

橋 特集



ギャラリー写真:たんぽぽの綿毛です。近くで見ると光を放っているように見えます。(十日市場:2018年11月20日)

表紙写真:視線を感じ花びらに目を向けると、大きな目をもつハエトリグモがこちらを見ていました。(十日市場:2018年10月21日)

FIELD·NOTE

no.99 Dec.

CONTENTS

06 特集 橋

08 人が守る、橋

10 橋が受け継いできたこと

12 橋との思い出

14 コラム この橋どんな橋？

18 暖簾をくぐるとみえるもの

20 稲作りは、人づくり

22 想い伝わるデイサービス

25 フィールド暦

26 都留の風景写真集―向寒のみぎりー

28 宝鉱山の跡をたどる

30 自然のなかで生きる

32 ムササビ観察日記

34 こてんさんぽ
連載第5回 秋の七草

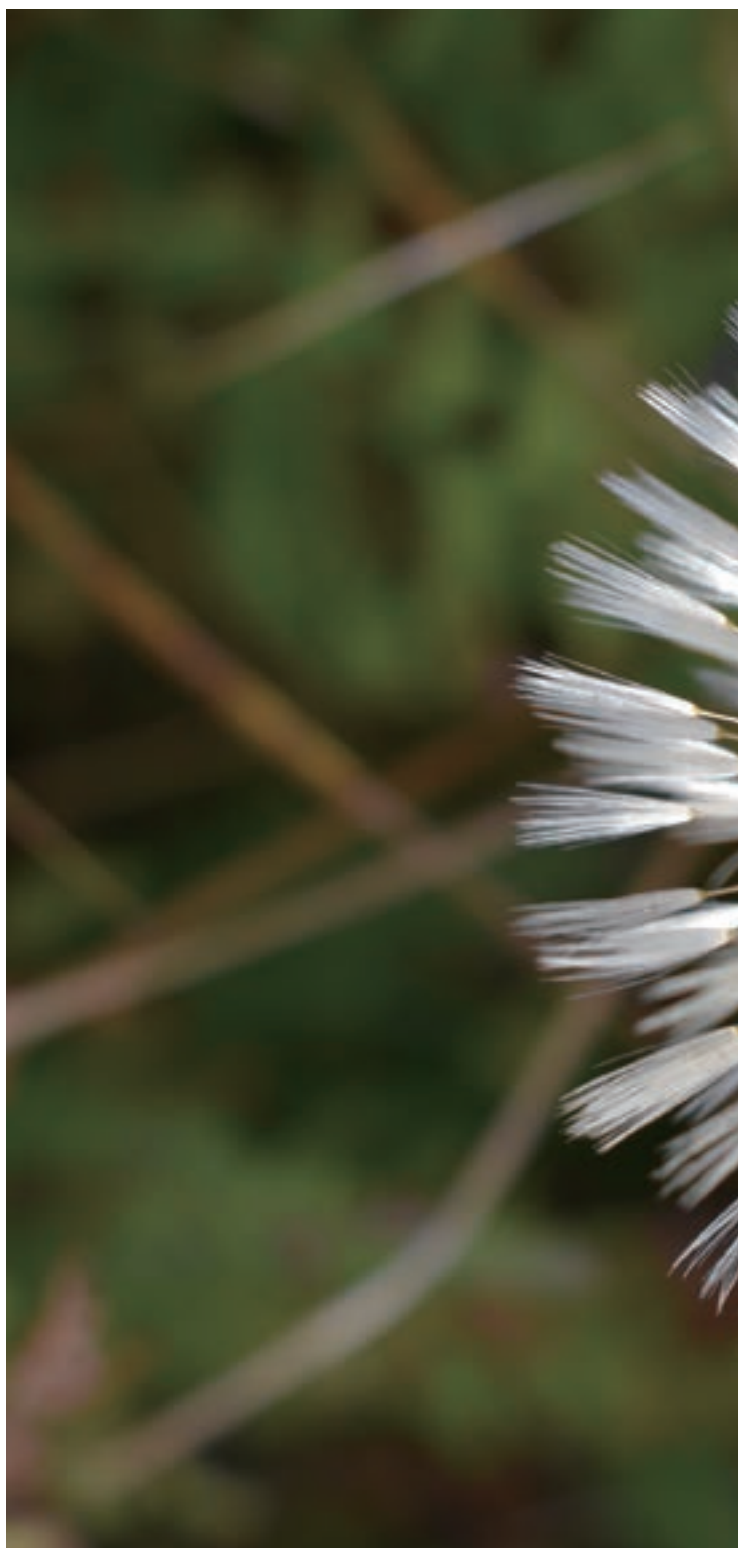
36 形ないものを残したい

38 自分の変化に気づく時間

40 養蚕業をつづけて
前編 養蚕業でつながる楽しみ

42 連載
さんちょうを見つめる 後編

45 センサーカメラが写した動物たち



FIELD MAP



山梨県都留市
面積：161.63km²
総人口：30,716人
(2018年11月現在)

今号で取り上げた橋

①
じょうなん
城南橋
p.8-9



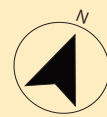
②
さいき
佐伯橋
p.10-11



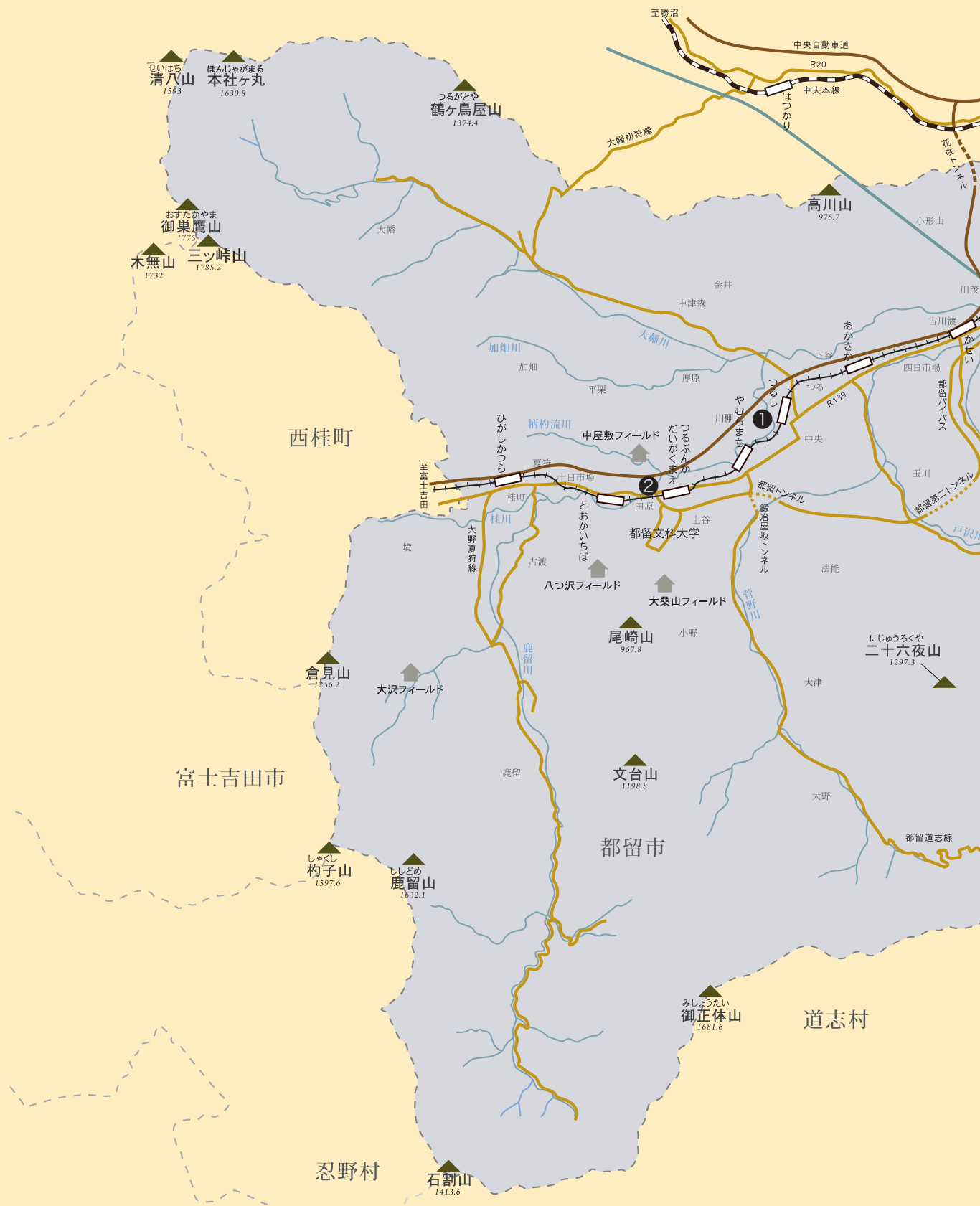
③
おちあい
落合水路橋
p.12-13



道路
川



0 1 km 2 km 3 km 4 km 5 km

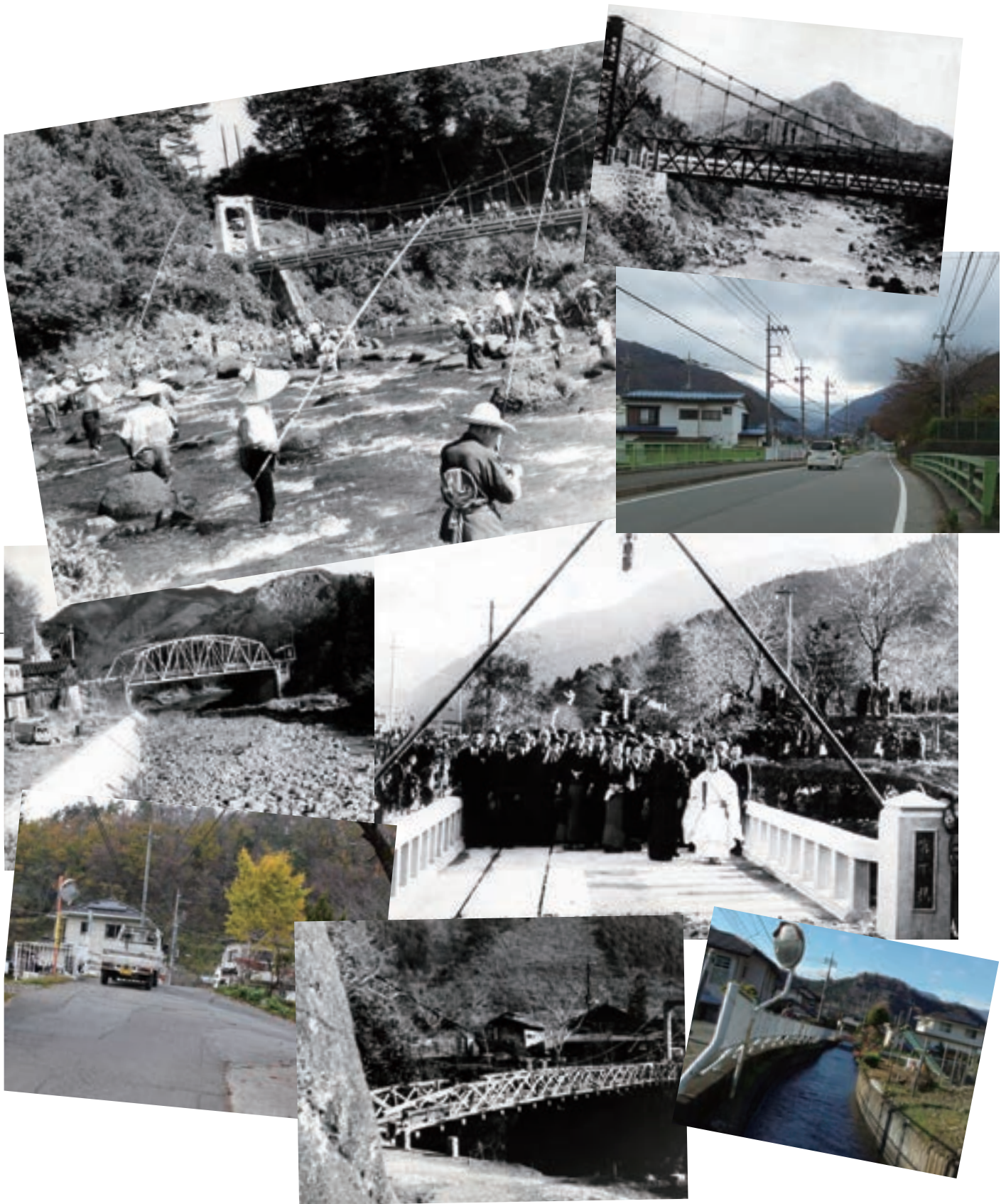


橋

水辺の多い都留市にとって、橋はなくてはならないものです。市内を歩くと、水路をまたいで民家へと続く小さな橋や、幅の広い川に架かる大きな橋など、さまざまな造りの橋を見かけます。橋の上から景色を眺めながら歩くとき、ふだん歩く道とは違った心地になります。

私たちは、そんな橋のある景色に惹かれました。

一つひとつの橋を注目して見ることで、橋について今までとは違った見方ができるのではないか。そう思った私たちは市内に架かる気になった橋に行ってきました。



人が守る、橋



富士急行線^{やむらまち}谷村町駅を出て右へまがった先の踏切を越えて進む。ちょうどやってきた車を追うように急斜面をくだっていくと、突然大きな橋が現れた。初めて訪れたときにその存在感と、どうどうと流れる水の音に思わず息をのんだ。

生活に欠かせないもの

「昔はやつぱり車は通れなかったですよ。（通れるものが）人、馬、リヤカーですよ。昭和20年から30年ころですよ。ちよつと裕

桂川左岸の川棚地区と右岸の上谷地区^{かみや}を結ぶ城南橋は、昭和35年に新しく鉄筋の橋として改築された。『水辺の記憶展』と題した冊子によると、城南橋は水害で流されたことがあるという。今は水害が起きても、びくともしそうにない立派なたたずまいだ。

川棚地区にお住まいの藤本紘一さん^{かじもとこういち}（73）にお話をうかがうと、城南橋の今と昔のようすを知ることができた。

福な家が車を買ったのにもついで市の人（市民）専用の小さいつり橋を大きく、強固なものにしたんですよ。今はたくさんの方が行き来する城南橋だが、今と昔ではようすが違ったようだ。流れがはやい桂川にかかる今よりも小さな橋を渡っていたと考えるだけで、橋を渡りながら足元がすくんでしまう。

また、藤本さんのお話から城南橋が川棚地区の人たちにとってどれほど重要なものなのか知ることができた。「今一番使われるのは、通勤通学ですよ。駅が近いから。だから災害で橋が使えなくなれば復旧するまでのあいだ街へ出られませんか」。中央自動車道の側道ができたから、橋が使えなくても迂回できるが4倍から5倍も遠回りになるそう。

「本当に、川棚の集落にしてみると、なくてはならない生活の橋ですね。それがなかったら生活できない。大事な道でもあるし橋です。多少構造が変わったにしても昔から大事な交通の手段だったわけです」。旧南都留郡宝村（現在の都留市の西部）へ行くときも城南橋を渡っていたという。今も昔も、地区と地区を結ぶ、なくてはならない橋だ。



①川棚地区側から城南橋を眺めたようす(2018年10月3日)②橋の入口は門のようだ(2018年10月3日)③整備されている橋のまわり(2018年11月30日)④藤本さんにみせていただいた資料。2011年の活動のようすが取り上げられている(2018年11月7日)

橋のある景観

城南橋のまわりには小さな公園やビオトープがある。その整備は、有志が集まった『城南グリーンクラブ』が長年継続しておこなっているという。そのメンバーでもある藤本さんは、「安心して車が通れたり、子どもが安心して通学できたり。その公園と同時に整備や環境を整えています」とおっしゃる。階段をつくったりベンチをつくったり、緑化事業で花を植えたりしたそう。当時は都留市内でこういった活動をする人はあまりいなかったから、画期的な景観保全の事業だった。「せっかくのいい景色や景観があるんだから、そういうのを保全することによって、後世に伝える必要性もあると思うんですね」と藤本さんはおっしゃる。

生活に欠かせない城南橋。これからもこの場所を大切にしていきたいと願う地元のかたがいる。城南橋だけでなく、渡る私たち、まわりの景観までもがたくさんの人の地道な活動によって守られていることに気づいた。

宇佐美温加(社会学科2年) 文・写真

橋の所在地…山梨県都留市上谷 1-7-29



贈 大 谷 木

さいき
佐伯橋を調べる
きっかけとなっ
た写真。1970年
ごろに撮られた

橋が受け継いできたこと

額縁に収められた1枚の白黒写真に出会った。滝の勢いに負けることなく悠々と桂川にかかる^{さいき}佐伯橋の姿に気づく。佐伯橋の歴史について知りたくなった。

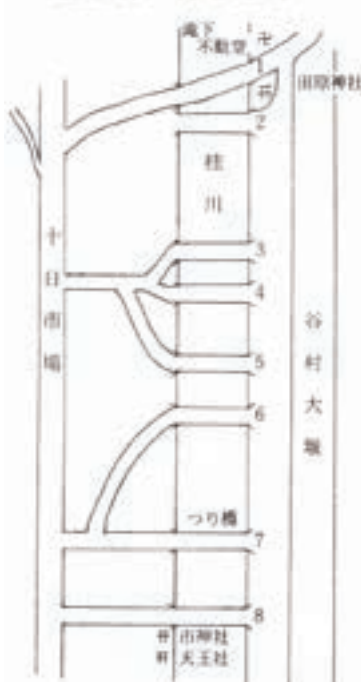
2本の佐伯橋

写真に写る佐伯橋の竣工は、1927年9月だ。幅が6メートルで長さが45メートル。橋の中央から水面までの高さは22メートルある。桂川を横断するようにしてまっすぐに架けられた佐伯橋は国道139号線と合流する。曲がり角が直角になっているため、速度をあげたまま角を曲がり切れない車の事故が多発したという。

事故をなくすため、国道139号線をのばして建設されたのが新しい佐伯橋だ。1966年3月に竣工した。佐伯橋の名前の由来については、むかし、田原の滝の付近一帯が佐伯の卿^{きょう}と呼ばれていたことからつけられたという。

近隣のかたからは、先に架けられた橋は「旧橋」、国道139号線の佐伯橋は「新橋」と呼ばれている。この記事でも近隣のかたと同じように二つの佐伯橋を呼び分けていく。

佐伯橋の変遷略図



1 が新橋。2 が旧橋。旧橋は晴夫さんが小学校に上がるときに竣工された。学校から家に帰り、旧橋以前に架かっていた木の橋が落ちるところを目撃したと晴夫さんはいう。【出所】中野八吾『十日市場小誌』1985 年 24 頁



現在見られる 2 本の佐伯橋。右が新橋。左が旧橋 (2018 年 10 月 28 日)

滝と橋の競争

橋の歴史について調べていると、

『十日市場小誌』という 1 冊の本に

出会った。十日市場地区で生まれ

育った中野八吾さんが 1985 年

7 月 20 日に発行したものだ。佐伯

橋について書かれたページのなか

に、佐伯橋の変遷略図を見つけた。

1992 年から 1996 年にわたつ

て 27 4 年間架かってきた佐伯橋が

順に並んでいる。滝の威力に押し流

されてしまったり、川を囲む岩が崩

れたりするたびに橋は壊された。そ

のたびに滝から距離をとった谷村方

面へと架け替えられたそう。変遷略

図からは川幅が広く、流れの早い桂

川に橋を架けることの大変さが伝

わってくる。

旧橋は桂川をまつすぐに横断する

佐伯橋の集大成だった。

旧橋を歩き交う人たち

橋付近の険しい岩肌は 1958

年にコンクリートで舗装された。現

在では落ち着いた風貌を見せる。そ

れでも雨が降った後の滝は、かさを

増しゴウゴウと勢よく流れる。2

年前まで滝のそばに住んでいたとい

う相川香代子さん(68)は嫁ぎ先の

お祖母さんから「雨が上がるころに

なると滝から泥臭い匂いがするよ」

という話を聞いたそう。はじめは

よくわからなかったものの、ここで

暮らすようになって、滝の匂いから

天気の違いがわかるようにな

ったという。

現在の旧橋は、学生が通学路と

して使うほか、田原の滝を見に来た

観光客が立ち寄る場となっている。

白黒の写真に写るバスを相川

さんに尋ねてみた。バスは当時富士

急行株式会社が運営していた循環バ

スだという。1970 年ごろには現

在の富士急行線富士山駅から大月市

方面に向けて 1 時間に 1 本ほどの間

隔で循環バスが走っていたそう。

相川さんも学生時代に利用したそ

う。相川さんのお義父さんである相

川晴夫さん(96)は谷村地域まで買

い物に出かけるときなど循環バスに

乗ったという。現在も旧橋と新橋の

あいだには「十日市場下宿」と書か

れた停留所が残る。

十日市場にお住まいの中野為雄

さん(82)にお話をうかがうと、現

在の楽山球場あたり一帯は畑だった

という。球場ができる 1985 年ご

ろまで、旧橋を渡る人のなかにはお

百姓が多かったという。

現在架かる 2 本の佐伯橋には、

滝とともにこの場所にあり続けるた

めの人々の知恵が受け継がれてい

る。私には、滝の近くに住んでいた

かたが滝の匂いから得た生活の知恵

を受け継いできたことと同じように

見えた。

江利そらむ(社会学科 3 年) 文・写真

橋の所在地…山梨県都留市十日市場 1527

11 FIELD NOTE 取材にさいしては本文中で紹介できなかったかたにも聞き取りさせていただきました。ありがとうございました。

橋との思い出

都留市に落合水路橋という煉瓦造りの橋がある。水を渡すためのもので、人が渡ることはできない。落合水路橋は明治時代に建設された。長い年月が経っても、今も変わらずそこに佇んでいる。橋がそこにあり続けるかぎり、橋との思い出は生まれ続けていく。

煉瓦造りの橋

富士急行線^{かせい}禾生駅で下車して、国道139号線を大月市方面に10分ほど歩いていくと、朝日川が流れる大きな音が聞こえてくる。音に耳を澄ませながら右手に視線を移すと、煉瓦造りの橋が見えた。落合水路橋だ。そのあまりの大きさに驚く。幅が広く、流れの強い朝日川に引けを取らないくらいどっしりしている。週末はこのすがたを見るために県外から訪れる人がいるそうだ。じつさいに落合水路橋を見たら、わざわざ足を運ぶ人がいるのも納得できる。そのくらい存在感がある。

川沿いの道を歩いて、橋に近づいてみる。煉瓦造りだからか、触るとひんやりしていた。遠くから見ると赤褐色だけれど、近くで見ると所々色あせている。長いあいだ、そこにあったのだと分かる。

『奥隆行写真コレクション』にも、落合水路橋の写真をいくつか見つけることができる。下の写真はそのうちのひとつで、戦前に撮られたものだそう。背景と重なって、橋が山を抱えているように見える。

1907年に建設されたもので現在、落合水路橋についてくわしいかたはいないという。近所に住むかた数人にお話をうかがったが、落合水路橋の印象は、ただ昔からここにあるものという感じだった。県外から見に来る人がいるくらいなのに、近所のかたにとっては見慣れたいつもの光景になっているようだ。山梨県民にとつての富士山みたいな存在になっている。人が渡ることができない水路橋だから、ほかの橋と比べると思い出や愛着が薄いのもかもしれない。

落合水路橋が思い出になる

落合水路橋の近くに小屋がある。そこは昔、水車小屋だったそうだ。そう聞いて、どちらも水に関するものなので、私は橋と水車小屋はなにか関係があるのかと思っていた。けれど、どうやら関係はないらしい。

水車小屋の役目が終わってからは、借家と

して使われていたそう。そして2019年にはこの小屋はカフェになっている。現在、カフェを作るために小屋はリノベーションされている。訪れるたびに、むき出しだった壁や床が綺麗になっていく。なかに入らせてもら



『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センター
フィールドミュージアム部門 2012年より



アーチは川沿いの道にまで続いているので、アーチの下をくぐることができる(2018年10月5日)

うと、鴨居(※1)が低いことに気がついた。小屋が作られた当時の日本人の身長に合わせた造りなのだろう。鴨居のように当時のままの箇所もあれば、大きく変えた箇所もある。落合水路橋側に窓を多く取りつけたことだ。「(落合水路)橋が見えるようにしたくて」。窓越しには落合水路橋の連続するアーチが見えた。

カフェができれば、ここにはもつとたくさんの人が訪れるようになるだろう。近所に住むかたは「(カフェができた)またにぎやかになっていい」と嬉しそうに話していた。来年、落合水路橋が見渡せるこのカフェができたとき、落合水路橋を見るために訪れた人たちがそうでない人たちにも、窓から見えるこの煉瓦造りのたくましい橋のすがたは目に焼きつくだろう。落合水路橋と一緒にすごした友人、口にしたもの、カフェの照明や音楽と混じりあつて、今よりも多くの誰かの思い出に残り続けるかもしれない。

時が経てば橋のまわりの景色が変わっていくように、橋のまわりで暮らしている人も変



落合水路橋を背に、小屋を撮った写真。窓が多く、引き戸もガラス張りになっている(2018年10月12日)

わっていく。そのいつぽうで、橋はずっとここにあり続ける。だから橋との思い出を語りつぐ人がいなくなっても、また橋との新しい思い出を創ることはできる。

私の都留市での思い出にも、落合水路橋の今のすがたが刻まれている。そしてオープンしたカフェへ足を運んだとき、私のなかの落合水路橋との思い出は、また一つ増えるだろう。

杉浦茜(国文学科3年) 文・写真

橋の所在地…山梨県都留市井倉 233

13 FIELD NOTE ※1 建築物の開口部の上部にあって、引戸、障子、ふすまをはめる溝をつけた機材。(『日本国語大辞典 第二版』小学館 2001年)

ひっそりとたたずむ

すいどうはし

「水道橋」



(2018年11月12日)

橋の近くに住む93歳の男性に干し柿をいただいた。そのまま縁側に座り、橋についてお話を聞く。「モスバーガー都留文大前店」のある通りに続いていた道が廃道となり、水道橋はつくられた。十日市場地区の熊太郎神社から流れてくる水が、いったん橋の近くの水道局へ行き一般家庭に流れ出る

ことから、水道橋と名づけられたようだ。この橋を通るのは、橋のまわりに住む人がほとんどだという。橋を渡ったその先は行き止まりになっていて、目の前を富士急行線が通る。川の水と橋の距離が近いことにより、都留の透き通った川に足を入れて水遊びをしたくなった。



住所：田原3丁目
長さ：約6メートル
横幅：約3.7メートル
竣工年月：1961年8月

この橋

どんな橋？

あまり人が通らないこぢんまりとした橋。何気なく歩いているだけでは気づかない橋。立派な姿で土地と土地とを結ぶ橋。私たちが都留で見つけた橋たちを紹介します。

『フィールド・ノート』編集部 文・写真

大きな川を超えてつなぐ ひしゃくながれはし 「柄杓流橋」



(2018年11月21日)

柄杓流川に架かるその橋は絶えず車が通っている。橋の上に立つてみると、水の流れている音が強く感じられた。この橋がつくられたのは1994年のこと。1969年の中央自動車道開通に伴う工事のさい、資材などを搬送する車両が通る必要があったという。それまで周辺には細いあぜ道

しかなく、車両が通ることが出来なかった。そのため、道が広げられたことをきっかけとして、橋を架けたのだという。橋が架かるまでは川を渡ることができず、都留市街に行くには遠回りをする必要があった。住民のかたは橋が架かってから便利になったとおっしゃっている。



住所：十日市場
長さ：約80メートル
横幅：約10メートル
竣工年月：1994年3月

見つけるとうれしい たはらはし 「田原橋」



(2018年12月18日)

都留市上谷にある「トラベルコーポレーション」から、「ウエルシア都留店」までをつなぐ道の一部分が田原橋という橋になつてい

ることを知った。田原橋の近くに住む渡部富貴子さん(90)、東京都にお住まいの娘の渡邊淑子さん(65)に昔の橋近くのようにについてお話をうかがう。橋が面白い。



住所：田原2丁目
長さ：約4.7メートル
横幅：約8メートル
竣工年月：1973年8月

特集

橋

人々の生活になくってはならない城南橋。

滝に流されながら、何度も架け直された佐伯橋。

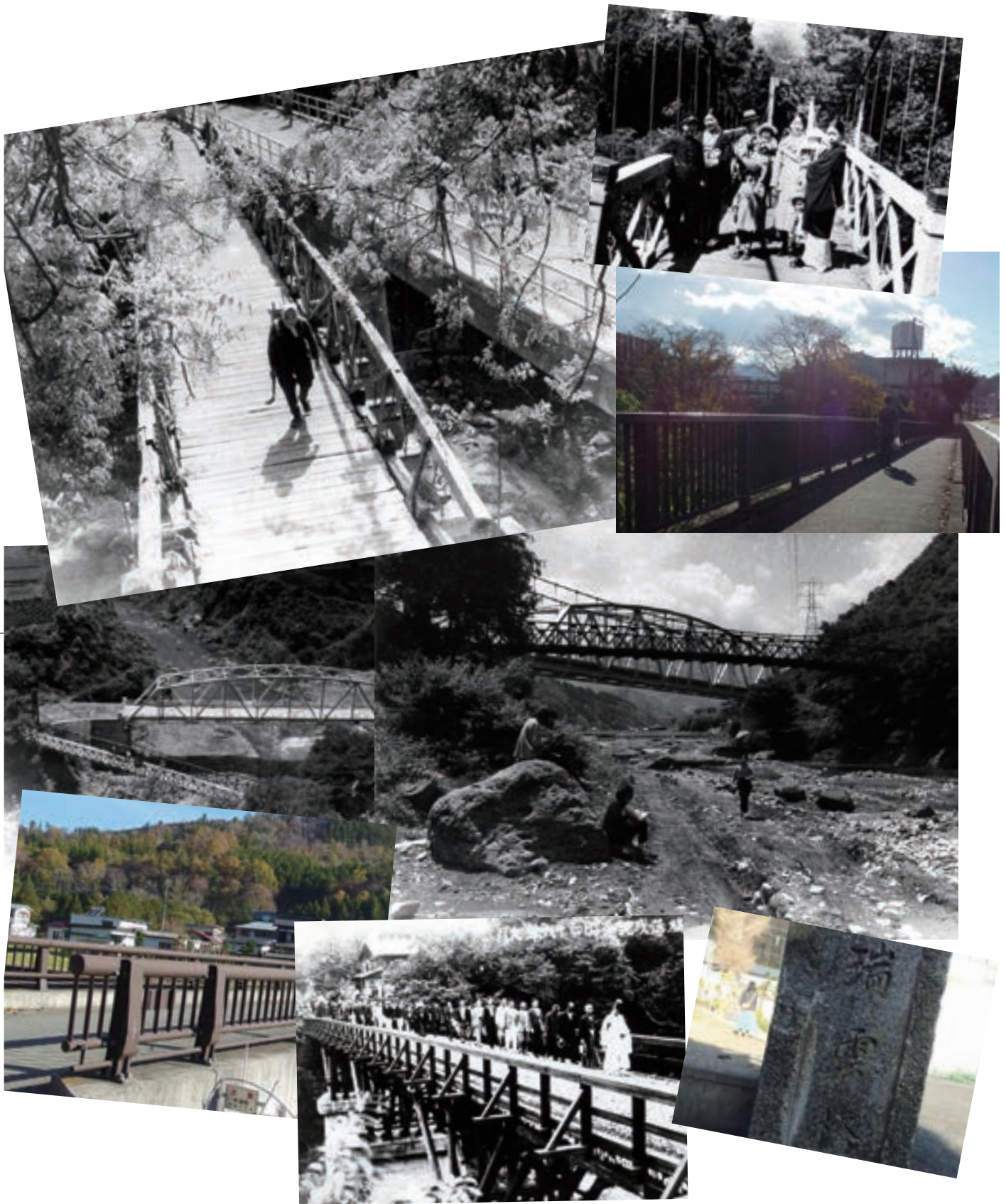
遠方からでも足を運びたくなる落合水路橋。

橋は人の手によってつくられ、長いあいだその場所にあり

続けています。

人と橋の関わりを知った今、橋を渡るとき、橋がつくって

きた人々の記憶に思いを馳せるようになりました。



暖簾をくぐるとみえるもの



お店の暖簾。青地と白地の境目のところが日焼けしてだんだん裂けて来たそう (2018年11月27日)

富士急行線十日市場駅から徒歩6分。国道139号線を富士吉田市方面へ進んでいくと見えてくるのは「うどん屋福ふじ」だ。創業当時からおおよそ15年かけているという趣のある青い暖簾。その暖簾をくぐると何がみえるのだろうか。

10月17日、私たちを迎えてくれたのはこのお店のご主人の遠山久さん(61)と妻のみな子さん(57)だ。久さんはさつぱりとした職人気質のかただ。調理場で力強くうどんをこねている姿は無駄がない。何回か来ると常連さんの好みもわかるそうだ。自分から「今日は○○でいい?」とたずねることも多いのだと聞く。実直さだけでなく、気さくさも持ち合わせているところが素敵だ。

妻のみなさんは人を安心させるチャーミングな笑顔の持ち主。お店の事務をになう縁の下の力持ちでもある。みなさんが「はい、お待ちせしました」と持つて来てくれるうどんは、笑顔と相まってさらに美味しそうにみえる。

美味しさの秘密

「福ふじ」のうどんのキャッチフレーズは「のどごしつるつと」。食べやすく、山梨県の名物である吉田うどんより、もちもちしている。「つるつとしたうどんを作るためには、うどんのゆでかたや、ゆでた後が大切」と久さんはいう。「俺のこだわりは全部ゆでるのをしつかり。うどんはゆでてから1時間するとタクタになっちゃうの。その時間を遅くするために、水でうどんを早くしめちゃう。それを冷蔵庫にいれておくと、少しでも長く持つようになるの」。

久さんとみなさんのこだわりは



「福ふじ」一押しのかんぴらうどん。かんぴらは奥さんが毎朝手作りしているそう (2018年10月17日)



十日市場駅から富士吉田市方面へ進むとみえて来る看板とのぼり(2018年11月27日)

うどんに留まらない。花かつおと昆布と煮干しのバランスの調整、唐辛子のあらびきやパウダーはこの産地のものがかいいか。出汁や辛味まで、どうしたらよりよくなるかを追求して今の味になったという。それらすべてに共通するのは「自分たちがうまい」と思うものを出したい、というお二人の思いにある。お客さんにもそれは伝わっているようで、「1日の残飯はほとんどないの」と久さんは嬉しそうにおっしゃる。

するとみな子さんが「長野(県)から来るおぼちゃん」が『いついつ来るから冷凍を50(玉)向こうで配る居心地のよさはどこから

から(用意しておいて)』っていうことや、卒業した文大生(本学の学生)の子が集まりのたびにきてくれるっていうこともあるね」と教えてくれた。こだわりのうどんは食べた人の心を離さないのだろう。私もその日、「厚意でいただいたうどんを、なくなるのを惜しみつつ完食した。

お店はもととがラーメン屋だったものを、改装せずにそのまま使っているという。置かれている家具にも味がある。懐かしいブラウン管のテレビ。昭和を代表する野球マンガ。多くの人が座り、少し薄くなった座布団。長年のお店の歴史を伝えてくれるものに、ほっとする人もきつと多いのだろう。

お店のなかを眺めていたら、部活前と思われる高校生が一人、お店のなかに入ってきた。高校生も気軽に入れる雰囲気のお店は珍しい。そう考えていると、あつというまにお店は満席



になった。カウンターにはおじいちゃんとお孫さん。テーブルには建設業者さんの集まり。座敷には子ども連れの奥さまがた。「福ふじ」には幅広い年代のお客さんが来る。そのことについて久さんは「座敷があるからじゃない?」とおっしゃる。しかし、きつとそれだけではないだろう。このお二人がいるから、この内装だからこそ生まれる、お店の雰囲気はほかのお店が真似できない心地よさを生み出していくのだ。私も親戚の家に来たような安心したひとときをお店ですごした。



上/閉店後に、久さんのうどんの仕込みをみせてもらった(2018年10月17日)下/お店のなか。カウンターからみな子さんが調理しているのがみえる(2018年11月27日)

取材を通して、みえたことがある。それは自分たちのことを少しも飾ろうとしないお二人のすがただ。味の試行錯誤やこだわりを話してくださいるときも大変だったようすは少しもみせず、納得するものを作ったかつたとただ語っていた。私なら自分分をよく見せたくなる。ありのままのお二人だからこそ、このお店がお客さんの心に響くのだ。私もお二人のように飾らず生きていきたい。

小林史佳(地域社会学科1年) 文・写真
平岡摩梨菜(社会学科3年) 写真

* * *

稲作りは、人づくり



にこやかな表情を見せる加藤さん

本学1号館で月に一度販売されるお菓子をきっかけに「みとおし」の存在を知った私は、10月17日に施設を訪ねた。そこで出会ったのは、職業指導員として「みとおし」に勤める加藤邦弘さん（60）だ。お話を聞いていくうちに私の心が温まってきた。

みとおしとの出会い

社会福祉法人あすなろの会「みとおし」は2006年、利用者さんが「食」に関わることを目的としてスタートした。利用者さんは食材にこだわりながら、うどん作りやお菓子作り、農業などをおこなっている。

岩手県釜石市出身の加藤さんは、子どもを授かり「食」について考えるようになった。9年前、耕作放棄地を活用しようと山梨県の西桂町に移住した。そこから農業に従事し始める。当時は、根や葉を通して水を浄化してくれる「マコモ」という植物を栽培していたそう。マコモの粉は水だけでなく、人の身体に対しても浄化作用があるらしい。あるとき「みとおし」の施設長に、マコモの粉を、施設で作っているうどんの材料として使いたいと頼まれた。それを機に「みとおし」に携わるようになったそう。

そこから農業を通して、社会で弱

い立場にある人の社会参加を手助けしたいと思うようになったという。

「はじめは、気の毒だと思いながらも、障がいのある人とうちが接したらいいのかわからず悩みましたね。でも『みとおし』で自閉症の子と接する機会が増えました。そのなかで、草取りにしても掃除にしても、僕らより正確に、かつ素早くこなしてしまいう利用者さんの姿に驚きましたよ。この子たちはもともと光を持っています。その光をもっと輝かせられるように支えたいと思いましたね。大きな可能性を持つ利用者さんたちの未来をどう作ったらいいのかと考えるようになったという。

性格を活かす

「みとおし」の数ある活動のなかから、私が気になっていたお菓子作りについてお話をうかがった。作業のようすも見せていただいた。「みとおし」ではお菓子の製造から販売までの作業をすべて利用者さんがお

こなう。作業は、計量・切る・混ぜるなどに分担する。加藤さんは「その子の性格を作業のどこかに活かさせたいいな。彼らができることを、僕らが見極めることがとても大事なんですね」という。

利用者さんが、頭のとっぺんから指の先まで神経を集中させて作業に食いつく姿に、私は声をかけるのをためらってしまった。ようすを見ながら、「お菓子作りはどんな感じですか」と聞く。すると「楽しいです！」と力強く答えると同時にパッと笑顔を向けてくれた。加藤さんは「この子たちがいないとお菓子は作れない」という。お菓子を食べると、利用者さんの作業の頑張りがまつすぐ伝わってきて、体の内から温かくなった。

みとおしの存在

「そりゃあねえ、大変ですよ。だけれど好きなことをやってるからね。彼らと一緒に居るとなんか心地よさ

を感じるっていうか」と笑いながら話す加藤さん。「みとおし」で働くことを、心から楽しんでるようだった。「利用者さんには、まんざらでもないな、自分の人生は、思ってたほしですね。どうやってこの子たちの生きる道筋を作ってあげたらいいのかなと考えたときに、やつぱりそこには『みとおし』の存在が必要かなって。また明日も『みとおし』に來たい、と思ってくれたらいいな」。利用者さんが生きいきと作業をする姿を見ていると、加藤さんの思いはしつかり届いているように感じた。

「ゆりかごから墓場まで」をテーマに、障がいのある人、お年寄り、子どもや学生が集まれる空間を作りたい。これが『みとおし』の次のステージかな。「みとおし」の未来を見据える加藤さんのまなざしは真剣であり、どこか心弾ませているよう

だった。「やつぱり人と人。人が人を救う。人が人を支えるんだよね。稲と人って重なってくるっていうか。実れば実るほどすばらしい人だって。他人からそう思われれば思われるほど、頭を垂れる稲穂のように謙虚になっていくのかな」。

人には心が備わっている。その心というものは、かけがえないものだ。誰かの人生を支えたいと思いつ、その人に寄り添う。それは簡単なことではないけれど、人を思う気持ちこそ、もつとも大切だということを加藤さんから教えてもらった。

加藤さんは、これからも「みとおし」に携わりながら農業を続けていきたいそうだ。加藤さんの、農業と「みとおし」への熱意。そして飾らずひたむきに努力する利用者さんの姿は、加藤さんがそつと口にした「稲作りは、人づくり」という言葉そのものだった。

風間悠花（地域社会学科1年）＝文・写真
小泉篤広（社会学科3年）＝写真

作業のようす



利用者さんが作業を分担し、ていねいにお菓子を作っている



お菓子を均一に分けている



フルーツ & ナッツバーができあがった状態



想い伝わる デイサービス

レクリエーションの運動会のような。赤組が白組の活躍を喜んでいる(2018年10月10日)



(2018年10月1日)

はじめて通рикаかったとき、それがデイサービス施設だとわからなかった。古民家で入りやすい雰囲気を持つこの場所では、どんなかたがどんな想いで働いているのだろうか。10月11日、職員の勝俣裕美さん(42)からお話をうかがった。

窪田りさ(社会学科4年)=文・写真
杉浦茜(国文学科3年)=写真

小規模デイサービス「優しい時間夏狩」は今年の6月で10周年を迎えた。おもに介護が必要なお年寄りが日帰りで通い、入浴をしたり健康診断を受けたり、ほかのお年寄りとの食事やレクリエーションを楽しんでいる。

ここでは1日あたりの利用者が10人以下と少ないのに対して、職員は4人。多くのデイサービスは35人から40人の利用者に対して職員が4人ほどなのに比べて、かなり手厚い個別ケアのサービスになっている。勝俣さんによると、このような古民家で利用者が少人数のデイサービスは10年前に流行ったそうだ。ところが今は都留市に約30軒ある介護サービス施設のうち、このような小規模なデイサービスは5軒ほどしかない。「超高齢社会に突入していくなかで、やっぱり今はもうたくさんの人を受け入れてもらえる施設のほうが、欲しくなってるんですね」と勝俣さんはしみり言う。



介護の仕事をはじめて約20年の勝俣さん。仕事は大変と言いながら、「でも、楽しいですよ。もうすごい喜んでくれますから」と笑顔だった(2018年10月11日)

レクリエーションができるまで

職員のかたは、とりわけレクリエーションの企画に奮闘しているそうだ。1か月以上も前から企画を立て、終わったらすぐ次というように、たくさん企画している。

たとえば今年の10月だけでも運動会、習字教室、外食レクリエーションがある。さらにお年寄り向けの教材を使って学校の授業をおこなう「おとなの学校メソッド」も1年半前から毎月おこなわれている。そのほかにも春にはいちご狩りに出掛け

たり、秋には富士河口湖町の紅葉を見に行ったり、都留市の文化祭に出展する作品を作ったりしている。

お年寄りが季節を感じられる行事を多く取り入れているが、それだけではない。職員のかたは仕事をしながら、お年寄りが何をしたいか、つねに耳を傾けているという。お年寄りの要望は「買い物に出掛けたい」、「ご飯を食べに行きたい」、「電車に乘りたい」といったことだ。「利用者さんの声を拾って、楽しんで



都留市の文化祭に出展する作品の制作途中段階。花紙を丸めたもので絵を描いている(2018年10月10日)

らったり、そういうことができるのが一番望みなんですけどね、私たちは」と勝俣さんは言う。

職員のかたの賜物

勝俣さんは「敬老会とか、たとえばクリスマス会とかするにしてもだれもピアノも弾けないし」と言いつつも、懸命に練習した出し物がお年寄りに喜んでもらえることを大きなやりがいに行っているようだ。

「うちの母親がフラダンス習っていて。だから衣装を全部借りて、母親に全部教えてもらって1曲4人（の職員）で」と明るく笑いながら言う。

「そういうほんとに、地道な作業です。楽器とかみんな弾けないけどピアノやったり、うふふ。それで練習するんです。みんな帰って送って、お掃除して、仕事が終わってそのあと」。さらには携帯電話で手本の動画を送り、家でも練習したそう。

そのため勝俣さんや職員のかた



みんなで童謡の「もみじ」を歌い終わり、おしゃべりに花が咲く（2018年10月11日）

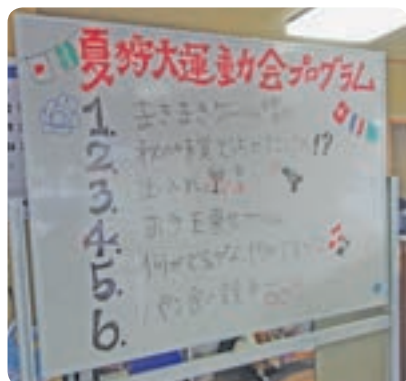
は、お年寄りにはもちろんそのご家族からも感謝されている。デイサービスを利用してはお年寄りが亡くなったとき、ご家族が葬儀の前この場所まで来てくれた。そして「夏狩さんで過ごした時間がね本人に

とつては最後だったけれども、すごく、人生のなかでいい時間を過ごせたと思う」と言われたそう。

そのようなときに、「あながち自分たちがやってきたことは間違いないかなって……思ったりしま

すね」と勝俣さんは言う。言葉は控えめでも、今までひたすらにお年寄りのためを思ってきたことを誇りとする、力強い言葉に聞こえた。

勝俣さんと話したあとで、デイサービスを利用するお年寄りにも話をうかがった。「来るだけで楽しい」、「（職員のかたが）みんなで楽しませてくれようと一生懸命なの。だから楽しい」という声と、いきいきとした笑顔がたくさんある。職員のかたの想いはしっかりと伝わっていた。



レクリエーションの運動会のプログラム。室内でも気軽に楽しめる工夫がされている（2018年10月10日）

フィールド 暦

10月中旬を過ぎると、手がかじかんでくる都留の秋。心なしか、生きものたちも少し動きがゆっくりになったような気がします。今号では、10月から11月の生きものたちのようすをお届けします。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



アオマツムシ

(2018年10月5日)@本学

アオマツムシは中国由来の外来種おもに樹上で生活しています。本学周辺では数年前から生息するようになりました。



クツワムシ

(2018年10月10日)@本学

ギリギリの仲間のなかでも大型です。肉食ではなく、おもにクズなどの植物を食べます。日本固有種です。



ヤマトシジミ

(2018年10月20日)@十日市場

体長は16ミリほどです。翅は灰色地に黒い斑紋が散りばめられているのが特徴です。



オオセンチコガネ

(2018年11月9日)@中屋敷フィールド

動物のフンや昆虫の死がい集まるコガネムシです。周辺にはシカのフンが落ちていました。



トドノエオオワタムシ

(2018年11月13日)@田原

アブラムシ科の昆虫です。飛ぶ姿が雪が舞っているように見えることから「雪虫」とも呼ばれています。



セスジツユムシ

(2018年11月30日)@田原

「都留アルプス」の稜線を歩いていたら、送電線の鉄塔の下で見かけました。卵管があることからこの個体はメスであると思われます。



2018年12月4日 @ 田野倉

都留の風景写真集

- 向寒のみぎり -

朝と晩の冷え込みが日増しに強くなり、冬の訪れを感じます。

やわらかな日のさす朝方に、都留市内を歩いてまわりました。撮りためた写真のなかには、わずかな時間のあいだに出会った人や自然の姿がおさまっていました。

今号の担当：江利そらむ（社会学科3年）
風間悠花（地域社会学科1年）



2018年11月20日 @ 十日市場



2018 年 10 月 16 日 @ 田原



2018 年 12 月 7 日 @ 上谷



2018 年 12 月 7 日 @ 上谷

宝鉾山の跡をたどる

都留市にはかつて、鉾山があった。その名前は「宝鉾山」。1970年に閉山し、今はほとんど人が来ない場所になっている。鉾山跡には何が残っているのか。気になった私はその跡をたどってみることにした。

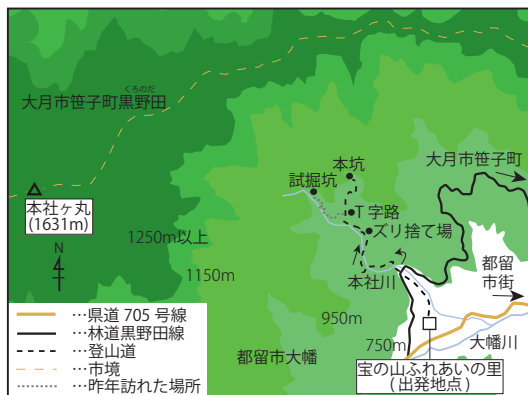
▲宝鉾山の本坑全景

鉾山の歴史

宝鉾山の跡は、大幡地区にある。

鉾山の歴史は古く、1884年に鉾山の調査（試掘）が始まった。その後、鉾山として鉾石を掘り出し、最盛期には山梨県内で一番の規模を誇っていた。だが地下資源が底をつき、1970年に閉山となった。

昨年、私は試掘坑（※1）と、資源として使えない廃石を捨てる「ズリ捨て場」を歩いた（『フィールド・ノート』95号参照）。今回はそのと



▲宝鉾山周辺地図

きにたどれなかった鉾山の本坑（鉾石を掘り出していた穴）に行ってみたいと思い、足を運んだ。

霧のなかから現れたもの

9月26日。この日の天候は霧雨だった。霧のかかる山中を進む。

入口から約1時間。林道にある通行止のゲートの横を通り抜けると、

霧のなかから巨大なサイロ（※2）が現れる。縦は10メートル、横は5メートルほどだ。外壁の錆びが目立つ。サイロをあとにして、ようやく宝

鉾山の本坑に着いた（写真①）。黒い柵があり、穴のなかには立ち入れない。外から穴のなかを覗くと、地面には水がたまっていた。

1937年の資料によると、この穴のなかは、道がいくつにも分岐し



サイロ。外壁は金属のトタン板造りのようだ

※1 試掘坑：鉾山の開発にあたって、鉾床（特定の鉾物が濃集した部分）の有無などを調べるために試験的に掘られた坑（穴）のこと

※2 サイロ：セメント・穀物・肥料などを貯蔵する塔状の倉庫

※写真はすべて2018年10月9日に撮影しました



水路の橋渡しとして線路のレールが使われていた



階段は手すりがあるが一段の幅が狭く、登りにくい



水路をはさんで反対側にあったトンネル。入口付近にはワイヤーのほかにビニールが散乱していた

本坑
周辺地図

 …水路
…通路
えん
堰堤

階段

本坑

宝の山
ふれあいの里

本坑のさらに上(階段を登ったさき)にあった坑。本坑と同じく高さは1メートルほどであった



プレハブ小屋は骨組みだけが原形をとどめる。奥の赤い壁は堰堤



本坑の入口。高さは約1メートル

ているらしい。人の手によって複数の道が掘られたことを考えると、その規模の大きさに驚く。

ふたたび鉱山跡へ向かうと

10月9日。この日はくもりであったが、日の差す時間もあった。

林道を登っていくと、9月に訪れたときよりも林道が荒れていた。9月末に来た台風の影響であろう。

この日も1時間ほどで本坑に着いた。天気がよかったので、本坑の周辺をくまなく散策してみる。

まず、本坑のある方向とは反対側にトンネルを見つけた(写真②)。どのような意図で掘られたのかはわからない。高さは1メートルほどで、私の身長では身をかがめないと前に進めない。入口付近の地面には、錆びた状態のワイヤーが放置されていた。なにかを運ぶ道具であったのだろうか。なかを覗くと、トンネルの出口方向も明るかった。トンネルの長さは20メートルほどだろう。

次に、本坑の上部に続く階段を上る(写真③・④)。するとすぐに、壊れたプレハブ小屋が現れる。休憩場所になっていたのだろうか。階段は長く使われていないことを物語るかのよう、枝や土砂がたまっていた。階段を上りきると、さらに奥へ続く道があった。そこを通り、レールの橋を渡ると(写真⑤)、もう一つ坑(穴)があることがわかった(写真⑥)。赤い柵で入口は閉められており、そのなかからはゴォーという水の流れるような音が響く。何も音を発していない下部の本坑とはちがって不気味だった。

現存する本坑などを前にすると、確かにそこには人がいたことを実感できる。とくに、残されていたワイヤーなどの人工物からは、それらがじっさいに使われていたことも伝わってきた。今に残るものは、閉山して約40年という年月がたったものだ。当時のようすを今に伝える、活きた郷土資料館のようである。

小泉篤広(社会学科3年) 文・写真

【参考書籍】『ミュージアム都留企画展「あの頃の都留を歩く」図録』

ミュージアム都留・都留文科大学地域交流研究センター 2017年

・片岡頼義「寶鑛山の現況」『日本鑛業會誌』53巻 311-313頁 一般社団法人 資源・素材学会 1937年

自然の なかで生きる

豊増華歩（国文学科1年）＝文・写真
江利そらむ（社会学科3年）＝写真

「富士の湧水が育てたワサビ」。インターネットでたまたまみつけたそんな言葉に惹かれた私は、湧水を利用してワサビを作っている「菊地ワサビ園」をたずねた。車を降りると感じるひんやりとした空気。都留市^{なつがり}夏狩にある「菊地ワサビ園」のまわりは山に囲まれ、つねに水が湧きだしている。いつも自然を感じるこの場所で生きるとはどういうことなのだろう。

雨のなか青々とおいしげるワサビの葉。ワサビは植えた時期ごとに、違う畑に植えられている

みえない努力

10月14日、出迎えてくださったのは、「菊地ワサビ園」の3代目・菊地^{きくち}富美男^{とみお}さん（52）。優しそうで明るいかた、というのが私の第一印象だ。話してもその印象は変わらない。雨が降る園内を案内していただくあいだ、私たちにすてきな笑顔を向けてくれていた。ときに雑談も交えながら、細くて入り組んだ道を歩く。7反歩^{たんぷ}（2100坪）あるという広大なワサビ畑には、余すところなくワサビが植えられている。歩くだけでも大変な畑を、菊地さんは毎日切り盛りされているのだ。1年間に植えるワサビはなんと1万5000本。その数だけで、ふだん購入者側からはみえない努力が伝わってくる。

ワサビの広がる風景

「もしよければ、きれいな葉っぱを食べてみてください」。そう言って渡されたのは、目の前の畑に生えていたワサビの葉っぱ。突然渡された葉っぱに驚きながらもいただく。少しだけかじって噛んでいくうちに徐々に広がるワサビの風味。ふだん食べている根ほど



わさび園で売られているわさび漬

はからくないし、苦みもあまりない。菊地さんの育てたワサビは、根から葉っぱの先まで、ワサビの味が染み渡っていた。畑に広がる鮮やかな緑色のワサビは、菊地さんの手によって植えられたものだ。まわりの自然に負けることなく堂々と広がっていた。手間をかけられ、大事にされながら生長しているのだろう。

楽しさとつらさ

この「菊地ワサビ園」のワサビはおもにワサビ漬けに使われる。その加工をおこなっているも菊地さんで、周辺の道の駅や高速道路のパーキングエリアで売られている。ワサビを育てる農家としての一面。ワサビ漬けを作って販売する商人としての一面。その両面

を持つている菊地さんだが、どちらのほうが好きなのだろう。疑問をなげかけてみると、菊地さんは「やっぱり、僕は農作業に打ち込んでいるときのほうが楽しい」とおっしゃる。農作業中、自分と向き合えること。やればやったほど努力や工夫が結果となって返ってくる。こと。生長の過程をみられることも喜びだ。そう語る菊地さんの表情はとても生きいきとしている。

私にとって農作業は朝も早く大変な仕事だという印象が強い。つらくなることはないのだろうか。菊地さんは「当然あります」と笑みを浮かべながらおっしゃった。「雨の日が続いたり、台風だったり。そういうときは思い切って温泉に行ってみたりして、ちょっと忘れる。もう自然には太刀打ちできませんからね。でも、そういうことが自然だと思えます」。そう言い切るすがたは力強い。これまで自然とともに生きてきた菊地さんの思いが垣間みえた。

私にとっての自然

都留市は山に囲まれている。昼と夜の気温の差は激しい。天気は変わりやすく、予期し

ない雨に降られることもある。私も授業中に分厚い灰色の雲を眺めると、うんざりした気持ちになってしまう。そう考えると、私も自然に振り回されているの気づいた。自然の変化を受け入れて、そのなかで生きていくという菊地さんの考えかたは、私にも当てはまったのだ。「それが自然。これもまた自然」。そう考えながら外をみると、ぼつぼつと降ってくる雨のなかでも、灰色の雲の下でも、いつもと違う楽しみがあると気づく。雨の音を聞きながら、ゆつくりお茶をしたり。友達と部屋で喋ってみたい。自然は変えられない。天気には気持ちを振り回されず、その日の楽しみを探す。それが私にとって自然のなかで生きていくということだ。菊地さんのお話のなかで、私はそれに気づくことができた。

小屋のなかで話をしてくださる菊池さん。
小屋には収穫したワサビが置いてあった

ムササビが子育てをはじめました

6月4日 ムササビが帰ってくる



4月16日以降、久しぶりにムササビの姿を確認しました。少し体が小さく見えますが、4月にいなくなった子どものムササビ(『フィールド・ノート』97号参照)が帰ってきたのでしょうか。そろそろ子育ての時期になります。子育てのようすを観察できるか楽しみです。

ムササビ 観察日記 - 5年目 -

2013年、本学の森にある二つの巣箱にムササビライブカメラを取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。みなさんも一緒にムササビを見守っていきましょう。

今号は2018年6月から11月のムササビのようすをお伝えします。

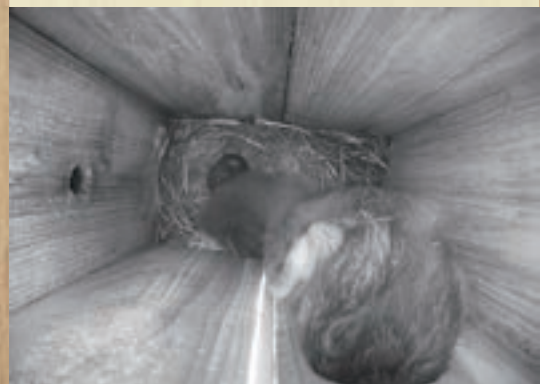
本学フィールド・ミュージアム=文・写真

7月31日 2頭の子ども



夜になり親が外へ出て行くと、子どもをはっきりと見ることができました。子どもの姿を初めて確認したときは1頭に見えましたが、2頭いることがわかりました。くっついて巣箱のなかにいることが多く、2頭いることが確認しづらい日が続きました。

7月30日 子どもを確認



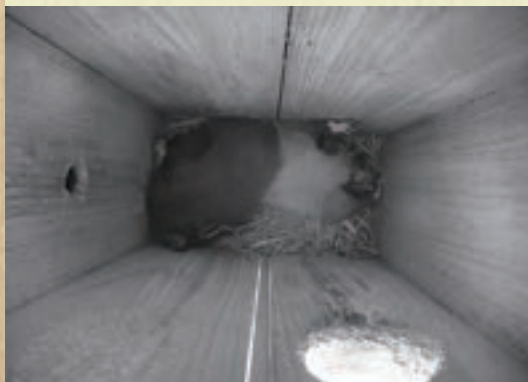
この日初めて子どもの姿を見ることができました。この巣箱で生まれたかどうかはわかりませんが、今期も子育てが始まりました。日中は寝ていることが多いムササビですが、このころから親が日中に外を覗いている姿が頻繁に観察できました。

8月5日 大きくなってきた



この日は親ムササビの上で子どもが寝ていました。姿を確認してから5日間しか経っていませんが、尾も長くなり体もだいぶ大きくなったように見えます。丸まって寝るだけでなく動くようにもなりました。これからの成長が楽しみです。

8月4日 子どもはどこに



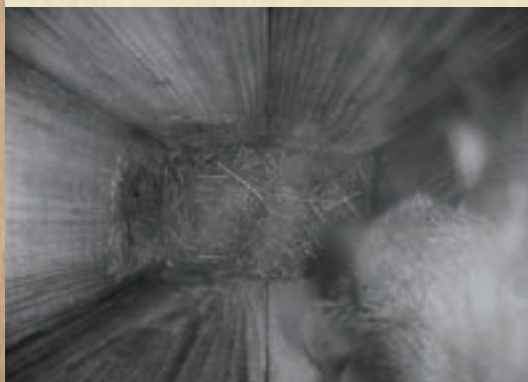
暑い日が続いているせいか、親ムササビは日中は体を広げて寝ています。前足を上に向けていたので、ふだんはあまり見ることのない足の裏や爪が見え、4本の指や鋭い爪を観察できました。子どものようすは、親に隠れて見ることはできませんでした。

11月19日 巣箱のなかで



子どもが巣立ったあとは巣箱が空になることが多いですが、今回はムササビが巣箱に集まっています。巣箱のなかに何頭いるのか、どれが子どもなのか、わからない状態になっています。これからも巣箱のようすを継続して観察していきます。

9月28日 外の世界へ



子どものムササビが巣箱から外に出ました。1頭がさきに巣箱から出て、もう1頭が30分後に外へと出て行きました。写真はさきの1頭が出たあともう1頭が外を覗いているようすです。この日から頻繁に外に出るようになりました。

こてんさんぽ

連載第5回 秋の七草

難しく考えずに、気軽に古典を楽しんでほしい。たとえば、お散歩しながら歌を口ずさむみたいに。きっと当時の人の気持ちが伝わるはず。
春の七草は有名ですが、秋にも七草があるのをご存知ですか？ 和歌と一緒に七つの名前を覚えて、お散歩しながら探してみました。

中里真琴（大学院文学研究科 2 年）＝文・写真・絵



秋の七草の由来は『万葉集』にある二つの和歌だ。作者は山上憶良

で、詠まれたのは今から1300年ほどさかのぼる、730年ごろ。野

で遊ぶ子どもたちに花の名前を教えている歌だとされている。この時代

の日本にはまだアサガオは無かったため、和歌にある「朝顔の花」とは

キキョウのこと。私はこれらの和歌を知るまで、秋の七草にどんな植物

があるのか知らなかった。

七草探し

七草粥として食べられる春の七草

と異なり、秋の七草は観賞用の植物だ。10月16日、27日に七草を探しに

散歩に出た。和歌を口ずさみながら、なんだか宝探しに行くような気分にな

った。

アパートを出てすぐに、民家の庭の隅に咲いた明るい紫色の花に目がいく。もしかして、と駆け寄ると、

秋の野に 咲きたる花を 指折り

かき数ふれば 七種の花

「秋の野原に咲いている花を、お指を折りながら数えてらん。七つの花が咲いているよ」

萩の花 尾花葛花 なでしこの花

をみなへし また藤袴 朝顔の花

「ハギの花に、ススキにクズ。ナデシコの花にオミナエシ。ほらそして、フジバカマにキキョウの花だ」



キキョウ（白）



キキョウ（紫）

3株ほどのキキョウだった。五つに裂けた花びらを元気いっぱいに広げている。隣には白いキキョウも咲いていた。紫色のイメージがあつたため、初めて見る白いキキョウに驚いた。順調な七草探しのスタートに嬉しくなる。



ナデシコ



ススキ

ススキは水辺に多く生息するそう
で、水路の多い都留市ではすぐに見
つけることができる。「尾花^{おぼな}」とい
う名前の通り、しつぽのような花の
穂がある。ふわふわしていて、スス
キを見つめるたびに思わずさわって
しまった。

ナデシコを見つけたのは、本学コ
ミュニケーションホールの裏にある
花壇だった。16日は1輪しか咲いて
いなかったが、キキョウと同じよう
に少し視界に入るだけで目を引く。
鮮やかなピンク色の花が、さびしく
なった花壇を明るく彩っていた。

楽山公園をのぼってほどなくし
て、ハギに出会う。もう開花の最盛
期を過ぎてしまっていたが、指先ほ
どの小さくかわいらしい花を見るこ
とができた。ハギはマメ科の落葉低
木で、秋の七草のうち唯一の「木」だ。
本学うら山の入口の向かい側
は、道路に沿ってクズが生えている。
クズはマメ科のつる性多年草で、く
ず餅の原料になる。太いつるにはチ
クチクとした毛が生えていて、さわ
ると少し痛い。手のひらくらいの大
きな花の房に驚いたが、甘くて優し
い香りがする。花はこの1房しか見
ることができなかった。楽山公園の
斜面にもクズが生えていたが、こち
らはもう花は咲いていなかった。

出会えなかった花たち

順調に始まったかと思えた七草探
しは、すべて見つけられずに終わっ
てしまった。残りの二つ、オミナエ
シとフジバカマは数を減らしてい
て、野生のものを見ることが難しく



クズ



ハギ

なったそう。キキョウも多くが園芸
種で、自生するものには出会えなく
なってきたという。万葉の時代
にはあたりまえに見られた花も、野
原とともに数を減らしているのだ。

* * *

夏が終わり、色鮮やかな花たちが
姿を消すと、秋の七草が私たちの目
を楽しませてくれる。それは木々が
赤く色づくまでのほんの短いあいだ
だけだった。もう少し早く探しに行
けば、ハギやクズの花の盛りを見ら
れただろう。

私は野山に生える植物の名前をあ
まり知らない。どこに生えていて、
いつごろ花を咲かせるのか。知らな
いから、数が減つても気がつかない。
自然を身近に感じることが、自然を
残していくことにつながると知っ
た。憶良は和歌を詠むことで、子ど
もたちに花の名前を伝えようとして
いる。私もこの記事で秋の七草のこ
とを少しでも伝えられたら嬉しい。

形ないものを残したい

「^{やむらてら}谷村寺めぐりうた」とは文字どおり谷村地域の寺をめぐるためのうただ。このうたを、長安寺の元住職である^{はなそのみつあき}花園光明さん(83)に教えていただいた。現在ではこのうたのことを知っている人はほとんどいないという。

谷村寺めぐりうた
かみ 上の原の法泉寺
が かけつぷちの普門寺
ながだいもん 長大門の西願寺
われがねたたきの長安寺
ちようあんじ
竹やぶつづきの円通院
えんつういん
太鼓たたきの東漸寺
とうぜんじ
お 方もちの専念寺
せんねんじ
ず っこけおびの西涼寺
さいりようじ

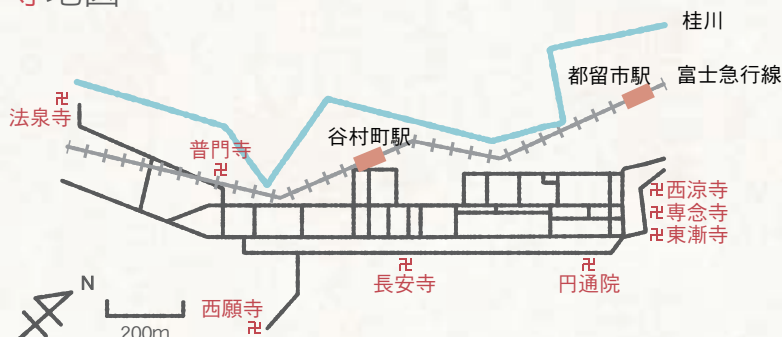
※光明さんが資料の端に書き残していた「谷村寺めぐりうた」。寺の名前の前にあるフレーズは、それぞれの寺がある場所や周辺の環境、寺の特徴から付けられたもの。例えば「ずっこけおびの西涼寺」の「ずっこけおび」は、ゆるく締めていることで、帯がへその下まで下がっていることをいう。これは当時、西涼寺が学問寺で、子どもだけでなく大人のお坊さんもあり、なかには帯をきちんと締めないお坊さんもいたことに由来するそうだ。

めぐりうたの起源

「谷村寺めぐりうた」はいつできたものなのだろう。光明さんは、このうたが江戸時代の後半にできたものではないかという。

ここからは左ページ上の年表を参照しながら読んでほしい。「西国三十三観音霊場巡礼」にはじまり、「坂東三十三観音霊場巡礼」や「四国八十八か所霊場遍路」などが各地でおこなわれるようになった。霊場巡礼とは複数のお寺をめぐり歩いてお参りすることだ。なかにはそれらの霊場が遠くて行けない人もいて、そのような人びとは地元で観音霊場巡礼をはじめた。そのうちのひとつが「郡内三十三観音霊場巡礼」だ。範囲は富士吉田市から上野原市まで。それでも歩くには広い。そこで、もつと気軽に寺めぐりを、と登場したのがより限られた範囲でできた「谷村寺めぐりうた」だと考えられる。このうたができた時期はうたのフレーズからも推測できる。それは

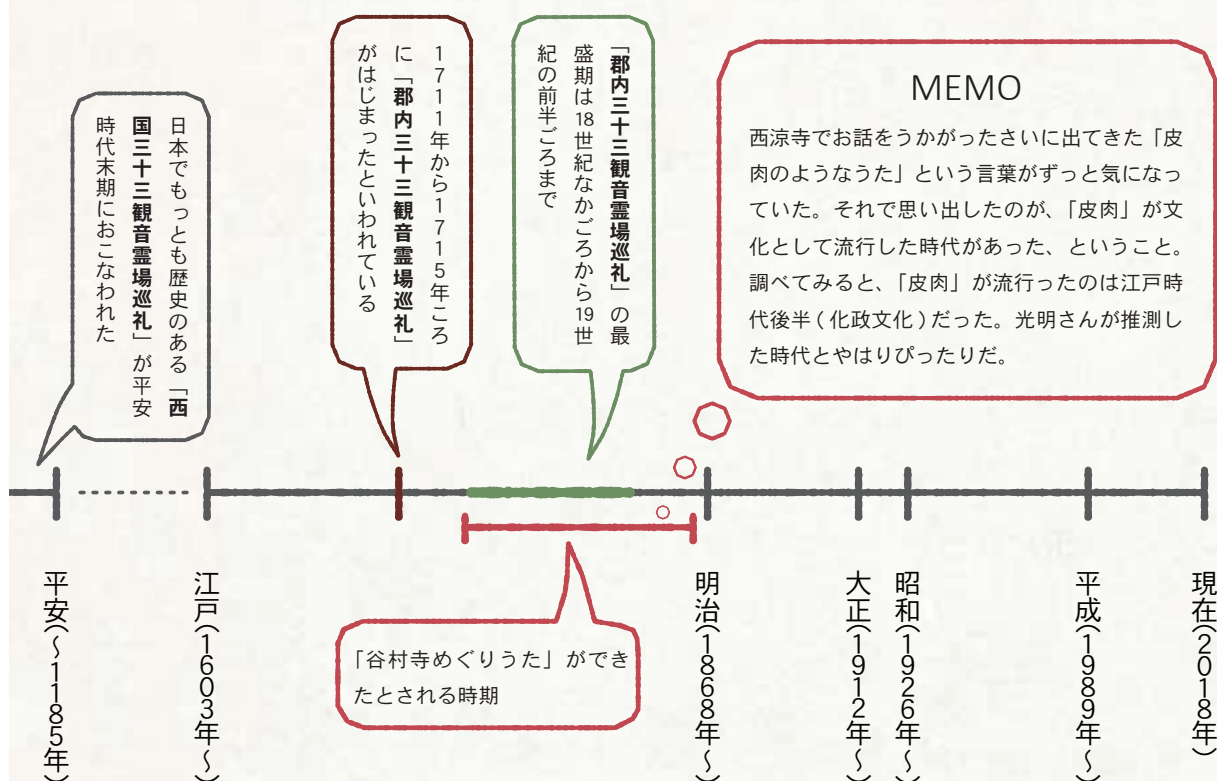
寺地図



「お方もちの専念寺」だ。「お方もち」とは「奥さんがいる」という意味。明治以降はどのお坊さんも配偶者をもつことが許されたけれど、それより前は決まった宗派のお坊さんしか許されていなかった。そのためわざわざ寺の特徴として「お方もち」を付けたということだ。だから配偶

【参考書籍】・窪田薫『郡内における観音信仰について』都留市郷土研究会 2013 年
・笹山晴生(ほか 15 名)『詳説日本史』山川出版社 2017 年 ・安富一夫『御城下「寺巡り唄」の解説』2013 年

「谷村寺めぐりうた」の歴史



者をもつことが一般化される前のものではないか、と推測することもできそうだという。

以上から、うたができた時期として江戸時代後半が浮かび上がってくる。

めぐりうたと遊び

もともとお参りのための寺めぐりであり、より気軽に寺めぐりをするために「谷村寺めぐりうた」は生まれた。けれど光明さんにお話をうかがうと、このうたは時間の流れとともにようすを変えてきたようだ。光明さんは「谷村寺めぐりうた」を1907年生まれのお母さんに教えてもらった。そんな光明さんの小学生時代の寺めぐりといえば、「遊び」だったという。

1945年の終戦時、光明さんは小学4年生だった。「西涼寺のお墓が

専念寺のお墓につながっていて、（さらに）東漸寺へつながっていてそして円通院へ行けるというような感じ」。「お墓はじいちゃんも土葬だったから、まんなかに石塔が一つたっていて、まわ

りは土葬しなきゃいけないから更地だったんだよね。だからまたいで踏んで遊べるようになっていたね」。小学生のころはうたをなぞるようにして、走りまわって遊んでいたそう。だ。「お墓をとおしてずっと、お墓のなかで遊べるような世界があった」という。

* * *

「谷村寺めぐりうた」ができたところから約250年経った。私が生きてきた21年間と比べたら計り知れない数字だ。その長い時間を越え、形ないうたが今日まで残ることとはすごく難しいことだろう。しかし、うたが形をもたないからこそ、お参りや遊びなど人びとのさまざまな文化に柔軟に寄り添い、今日まで残ったのではないだろうか。

これからさき、このうたが寄り添える文化があるのかはわからない。けれど、できるだけ遠い未来まで残ってほしい。

平岡摩梨菜（社会学科3年）＝文

取材にさいしては本文中で紹介できなかったかたにも聞き取りさせていただきました。ありがとうございました。

自分の変化に気づく時間

「掃除の時間は自分に向き合う時間だよ」。
私が小学生のころ、近所のお坊さんがそう話
していたことを覚えている。禅寺の修行僧た
ちはただ黙々と掃除をしていたけれど、自分
に向き合う時間とはどういうことなのだろう。



棲月院の話だけでなく、十日市場地区の昔話もたくさんしてくださった白井さん

10月19日午前9時ごろ、十日市場地区にある棲月院^{せいがつ}にうかがった。玄関の扉を開けると、住職の白井弘成さん^{うすい こうせい}（79）が、にこっと白い歯を見せて出迎えてくださった。「立って話すのも疲れちゃうよね」と本堂に案内される。ちょこんとお菓子がのつた小さなテーブルとイスが二つあり、私たちはそこに向かい合って座った。

棲月院は曹洞宗のお寺で、建てられてから60年ほど経っている。白井さんはここで18歳のころからお寺の仕事をしているそう。そのあいだに臨時教員養成所（現在の本学）に入学し教員免許を取得した。38年間教員をやりつつお寺で働き、教員を退職したいままはお寺の仕事だけだという。

曹洞宗の修行

曹洞宗の大本山永平寺^{えいへい}は福井県にある。永平寺などの道場では、修行の内容や時間がすべて決められているそう。たとえば朝4時に起きてお経を読む人、当番で作務（※）の人、というようにしているという。初めは慣れない生活に苦しんでいた僧も、3か月経つと楽になると白井さんは聞いたことがある

※禅寺では僧が掃除などの作業をすることを指す



窓の外をのぞいてみる。よく見ると右奥の木の下に落ち葉があった

らしい。そして2年いても3年いても道場から出たくなるといふのだ。修行とはそういうものだと言井さんはさらに続ける。

「修行つて苦だと思ってるあいだは修行ではなくて、ただ上からの押しつけで苦しんでいる。自分からすすんでできない。えらいお坊さんになると、いろんな人との付き合いがあるけど、そのなかでもって自分を高めようとする」。

棲月院の庭

曹洞宗の開祖、道元の教えは、朝起きてから寝るまでが修行だというもの。白井さんによると曹洞宗の教えはそんなに難しいものではなく、日常の当たり前のことをやり続けるそう。作務もその修行の一つである。私は汚れたら掃除するというだけ。そのタイミングもばらばらで毎日する習慣はない。そこがきれいであっても磨き続けるような感覚なのだろうか。

「うんうん。たとえばね、お茶をこぼしちゃったと。それはね、そこが汚れていたから必然的にこぼれちゃったんだと。そして自分がそこを掃除しなければならぬ。そういう掃除は、毎日毎日やることじゃなくって。そういうことに自ら気づくこと。お茶がこぼれたのはこぼしたんだと。そこが汚いから掃除しろって意味かもね」。白井さんは私の目を見ながら、ゆっくり、ゆっくり話してくださった。

すると白井さんが「ちよつとここ暗いよね」とすぐそばの窓を開けてくれた。朝の冷たい空気と光がずっと本堂に差し込んできて

背筋がぴんと伸びる。窓の外を見ると柿の木が目に入った。そろそろ葉が落ちてくるころだろう。

「私の場合、庭をこう見るでしょ。葉っぱがたくさん落ちてるよね。これは自分の仕事だつて気がついたときにする。2日に1回のときもあれば1週間に1回のときも」。そのように気づくタイミングはきつと人によつてばらばらだろう。いま見ている庭の落ち葉も、私にはたくさんだと思えなかった。

* * *

当たり前のように繰り返しておこなう掃除。気分がいいときはもつとしたくなる。誰かに言われて嫌々やるときれいにならないし、慣れてくると手を抜いたり、楽をしたりすることもある。そんな気のゆるみは、日常の掃除で気づくことが多いだろう。自分自身の変化とともに掃除の頻度も変わる。

掃除をして自分に向き合うということがどういうことなのか、はつきりとはわからない。けれど私にとつての掃除の時間は、自分のささいな変化に気づく時間だとわかった。

山内利奈（社会学科4年）＝文・写真



養蚕業を つづけて 前編 養蚕業でつながる楽しみ

水越さん宅の2階。屋外で飼育ができるようになるまでの数年ほど2階が養蚕に使われていた。現在は外の小屋で蚕を飼育している(2018年11月9日)

繭を作る蚕かいこという生きものがある。その蚕を育てて繭から生糸かいとを作る産業を養蚕業ようさんぎやうという。1900年代、山梨県の郡内地方(※)で農業をしていた人たちにとって貴重な収入源だった。大月市で一軒のみになった今も養蚕業を続けていらっしゃる水越さんご夫婦から当時のようすをうかがった。

蚕のことばかり

水越さんご夫婦は大月市猿橋町さるはしで養蚕業を続けられている。養蚕業がさかんだったころ、水越さんの集落ではほとんどが養蚕業をしていた。近所で話すことはいつも蚕のことばかりだったとおっしゃる。蚕が成長してクワの葉を食べられるようになる時期を「くわつけ」と呼ぶ。「こつちはくわつけ(し)たよ」「ひとつくわかれて(クワを食べさせて)やったよ」とお互いの蚕のようすを報告しあっていたそう。

近所で水越さんの奥様が話題になることもあった。奥様は東北地方から来られたので、初めは養蚕業のやりかたがわからなかったそう。長靴を履いて蚕を飼育していたら、近所に笑われたという。靴を履いてしまうと、

※郡内地方とは、山梨県東部桂川流域、南・北都留郡の呼称



蚕を踏んだときに気づけない。踏んでしまっても足をどけられるように、仕事は裸足でするものだと後からうかがったそう。

外にできれば「お前のところはクワ（の葉）あるか？ ないならやるぞ」と声をかけられることもよくあった。養蚕の時期が来ると、どの家も人手が足りないのです、近所から手伝いに来てもらうのが常だった。蚕が病気になるれば、「石灰まけば病気の蔓延止められるよ」と解決策を教えあった。水越さんのまわりでは、仕事ぶりや仕事の環境をお互いが理解しあっていた。だからこそ助けあえる関係ができていた。

大月と都留のつながり

1900年代は全国で養蚕が奨励されており、山梨県では「蚕業指導所」と呼ばれる県の組織が各農家に向けて養蚕業の技術を専門的に指導していた。水越さんは地域の代表として蚕業指導所で養蚕のノウハウを学び、地域のみんなにその技術を持ち帰ったという。地区ごとには個々の養蚕家を統括する「郡養連」と呼ばれる団体があった。水越さんは、都留市内の郡養連は富士急行線谷村町

駅の裏にあつたと記憶している。大月市にも独立した郡養連があつたが、郡内地方の指導の仕方はみんな同じだったそう。大月市も都留市も雨が多くのクワが育ちやすい、養蚕業に適した環境だった。

当時のようすを語る水越さんの表情は明るく、楽しそうだった。しかし現在大月市で養蚕をおこなっているのは水越さんご夫婦、一軒のみ。今年で84歳になる水越さんは体力に余裕がなく、養蚕業をやめたいこともある、と話してくださった。それ以上に同じ仕事をする仲間がいなかったことがさみしいとおっしゃる。

水越さんが作った生糸は出荷されたのちに郡内地方の機屋さんのもとでネクタイに仕立てられる。「水越さんところが一番だね」と褒められるそう。認めてくれる人がいる。だから「やれるだけ（やろうと思う）」と水越さんはおっしゃった。

同志はいなくとも、まだ大月の養蚕業には人とのつながりがある。蚕を通した人とのつながりを感じることができるところこそ、水越さんは養蚕業を続けている。

高橋未瑠来（本学卒業生）＝文・写真

▼脱皮の準備を始めた蚕。この地域では動きが緩慢になるようすからこの時期の蚕を「とめっこ」と呼ぶ（2018年6月8日）



イラスト下の四字熟語は、それぞれのお店の経営コンセプトです。

⑤ JEAN'S NEW YORK



「良衣気楽」

⑥ 加藤ホンダ販売



「即断即決」

⑦ オサダ薬局



「温故知新」

車の通りは多いけれど、歩いて
いる人は少ないように感じる。しか
し店内を覗くと、お客さんが座りな
がらお店の人と話をしている光景を
よく見かける。あるときは薬局で、
お客さんとお店の人が化粧水の話を
していた。またあるときは服屋で、
店主のかたとお客さんがコーヒーを
飲みながら世間話をしていた。商品
の売り買いだけではない空間は、時
間の流れが外よりもゆったりとして

お客さんとお客さん

今、三町商店街のまちなみを記録
に残したい。そんな思いで、私は
このページを企画した。前編では
三町商店街を利用する人々の、昔
と今のようすを記録した。今回は、
お店の人とお客さんがどのように
関わっているのかを記す。

いるようだった。
「夏はね、小学生なんか来たら
スイカ切ってあげたりね」と、「フ
カサワ食料品店」の深沢雅寛さん
(69)は話す。手があいていれば、
少しの商品でもお客さんのお宅まで
配達したり、配達のついでにお客さ
んを送って行ったりもするのだとい
う。こういった小回りのきくサービ
スは、商店街ならではのものだろう。
「JEAN'S NEW YORK」にはじ
めて訪れたとき、店主の上原香織さ
ん(47)とお客さんが、お店の一角
でコーヒーを飲みながら座って話を
していた。このお店のレジカウ
ンターの奥にはコーヒーメーカーとい
くつかのカップが置いてある。その
手前には小さなテーブルと、2人が
座れるほどの大きな木の椅子が置か

後編 三町商店街を見つめる

⑫ ボン・ジュール



「美顔美肌」

⑬ むらまつうどん



「千古不易」

⑭ 中村屋菓子店



「悠々自適」

⑮ ナカムラ薬局



「一生青春」

三町商店街スケッチ（後編では中央一丁目の交差点から西涼寺側を取りあげています。）

① イワマデンキ



「修理一貫」

② ネットデンキ



「一期一会」

③ 上田酒店



「酒天美禄」

④ 深沢食料品店



「鮮菜一遇」

れている。ふつうの服屋さんには無いようなスペースが新鮮だった。「ショッピンングセンターとかと違って、こういう小さい店が一つずつあるところって、なかなか入りづらいじゃない。だから、少しでも入りやすいようにって工夫してるってかんじかな」と上原さん。

上原さんにお話を聞いているとき、1人の男性が店内に入ってきた。「たまたま通ったら店が空いてたからさあ」とその男性は笑いながら話し、上原さんと一言二言交わしてすぐに帰った。「この店は商店街の角にあるじゃない。だからその道（国道139号線）を通る人には、夜ここに明かりがついているだけでも安心するって言われるよ」と上原さんは笑顔で話す。このお店は、三町商店街の近くを通る人にとっての灯台みたいだ。

上原さんは「愚痴とか、だれかに話したいとか、ほんとになんでもよくてね。なんか人と話したいってなったときにあたしを思い出してく

れたらうれしいな、と思う」と話す。そんな存在がいつも同じ場所にあつたら、顔を出しに行きたくなるだろう。お話を聞いているとき、店内に入ってきた男性の気持ちが分かる気がした。

「ここに来るお客さんは、自分が求めている商品をお店側が知ってくれているってことを分かっているんだよね」。そう話すのは、三町商店街振興会の事務局長であり、「ナカムラ薬局」の社長である金巻裕さん（53）だ。ショッピンングモールに入っているテナントとは違い、三町商店街は都留市に住んでいる人がそこでお店を営んでいる。だからこそ、お客さんの家族構成や職業、来られる時間帯などを把握している場合が多いのだという。専門医のいる病院が限られる都留市では、身近に薬や化粧品のことを相談できる存在は貴重だ。そのうえ、お店の人とお客さんがお互いをよく知っているからこそ、相談できることもある。

⑧ 喜和田屋



「笑所福来」

⑨ ときわ商会



「良品色々」

⑩ だるま寿し



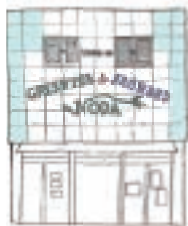
「一食万福」

⑪ メガネのおかた



「独立独歩」

16 野田のり茶店



「色即是空」

ふと思い出して、話をしたくなったら会いに行ける。教えて欲しいこ

* * *

が必要なんじゃないかな」。

17 アキヤマ電気



「大願成就」

18 ブティック栄



「桃李成蹊」

19 サノヤ



「春夏秋冬」

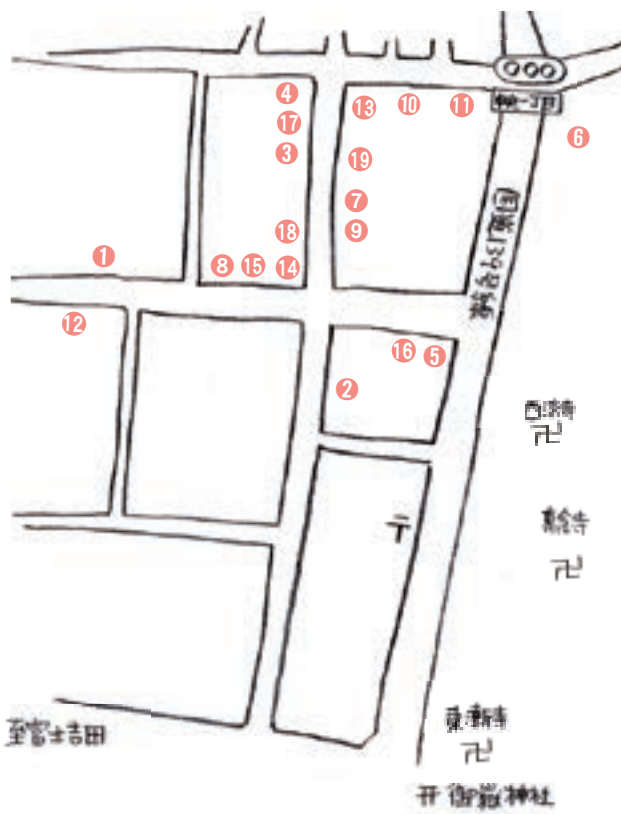
身近に自分のことをよく知ってくれている薬屋さんがいることは、お客さんにとって心強いことだろう。

とがあつたら、家電や薬のアドバイザーをもらいに行ける。この人に用があると思いついたとき、営業時間ならいつもそこにいる。三町商店街は、そんな人が集まっている場所だ。

上原さんは私に、「またいつでもおいでね」と言ってくださった。三町商店街は今の私にとって、ただ通るだけの場所ではない。足を止めて「あの人、今日もいるかな」と考え

る場所になった。お店を一軒ずつスケッチすることで、看板や外観にこだわりや個性があることを知った。三町商店街のことを、自分の言葉で話せるようになった。私が記録した三町商店街は、この先変わっていくかもしれないけれど私の目で見つまでも記憶していきたい。

高橋光（比較文化学科3年）文・写真・絵



センサーカメラ が 写した動物たち

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



ニホンジカ (2018年8月7日 3:40)
からだに白い斑点があるので夏毛です。
冬毛になると白い斑点はほとんど消え
てしまいます。本学周辺でも、夜に鳴
き声が聞かれるようになりました。

本学のうら山で暮らす動物たち。うら
山を歩いてみると、鳴き声や物音が聞
こえてきます。けれどなかなか姿は見
せてくれません。赤外線を感じると
自動でシャッターが切れるセンサー
カメラをとおして、動物たちの姿を
のぞき見てみましょう。今回はキャン
パスのムササビの森で記録された
動物たちを紹介します。



ニホンイノシシ (2018年8月12日 23:55)
ムササビの森では、はじめてカメラに記録
されました。本来は昼間に活動する動物で
す。落ち葉や木の枝で巣を作ります。

FIELD NOTE

no. 99 Dec.

発行人

北垣憲仁 (48)

統括編集者

西教生 (25)

編集長

山内利奈 (38-39)

小泉篤広 (4-5,28-29)

平岡摩梨菜 (36-37)

副編集長

宇佐美温加 (1,8-9,16-17,48)

編集

塚原瑞穂 (46)

中里真琴 (34-35)

小俣溪和 (2-3,32-33)

窪田りさ (22-24)

江利そらむ (6-7,10-11,26-27)

佐藤琢磨 (46)

杉浦茜 (12-13,45)

高橋光 (42-44,46)

風間悠花 (14-15,20-21,26-27)

小林史佳 (14-15,18-19,25)

豊増華歩 (14-15,30-31,46-47)

寄稿

高橋未瑠来 (40-41)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD・NOTE no.99

発行日：2018年12月25日

発行部数：700部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

秋を感じる香り

き おんがぐんと低くなり、あたたかいお風呂が恋しい季節になりました。私の家では、寒くなると薪でお風呂を沸かします。薪を燃やす香ばしい香りがお風呂場に満ち、空気まであたたかいです。都留市内を散歩しているとちらほら見かける、家の脇に積み上がった薪。この家の人も、薪で沸かしたお風呂であたたまっているのでしょうか。薪を燃やす香りが漂う、秋の夕暮れ。私の心もほっこりあたたまります。(塚原瑞穂)

の んびり秋空を見ながら深呼吸をしたとき、爽やかな香りが……と思いきやツーンと鼻を通る刺激臭。銀杏の香り。小さいころ、銀杏は謎の食べ物で、おいしいかおいしくないかも分かりませんでした。父にそういうと、大人になると美味しさがわかるよといわれていました。それがお酒のつまみになると知れば、あの香りも憎めない匂いに思えてきます。でも、秋空を見上げるときぐらいは銀杏の香りは遠慮したいものです。(佐藤琢磨)

がね色の蜜と胡麻がかかったあれを思い浮かべるだけで目尻が下がる。四角いようかんに変身したあれも大好き。けれど私がいちばん好きなのは、自分の家の炊飯器でふかしたホクホクのあれです。ふかしたてを手で二つに割ると、湯気と一緒に素朴で甘い香りがモワモワと立ちのぼってきます。私はこの香りをかぐと、季節は秋だけでいいとすら思います。秋が1番おいしい、さつまいもの話でした。(高橋光)

お詫びと訂正

97号裏表紙に「マムシグサの知恵」と表記しましたが、マムシグサは種類が多く識別も難しいため、今後は「マムシグサの一種」と表記します。

97号28～30頁・98号20～22頁に掲載された「水路を歩く」連載記事で「柄杓流川」を「しゃくしながれがわ」と記載していますが、正しくは「ひしゃくながれがわ」です。

98号6頁の文に、縮尺の「大きな」と記載していますが、正しくは「小さな」です。

関係者および読者の皆さまには訂正してお詫び申し上げます。



次回予告

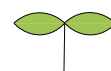
編む

(仮)

2019年3月発行予定



テントウムシの越冬



本学の自然科学棟には、毎年10月下旬から11月にかけてテントウムシが越冬にやってきます。なかでもナミテントウは数が多く、集団で冬を越します。

テントウムシは白色を見分けることができるといわれています。白色がほかの色より明るいので、ナミテントウはどうやら対象の明るさのていどを見分けているようです。そして、その明るさを目印にやってきます。

1980年代後半には本学自然科学棟全体で10万匹を超えるナミテントウが記録されています。ところが近年、その数は大幅に減りました。2013年に調査した結果では、約1600匹でした。

なぜ越冬するナミテントウがこれほどまでに減ったのでしょうか。私たちの目には見えない自然の変化が起こっているのかもしれません。みなさんの近くでナミテントウが越冬する場所がありますか？

＼2008年11月7日／



＼2018年11月21日／



【参考書籍】『ナチュラリスト入門—落ち葉の手紙 秋』新妻昭夫編 岩波書店 1989年

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。